

訪問栄養食事指導・高齢者関連の学術論文

1	栄養指導の実践 行動療法を取り入れた高リン血症改善のための試み(査読付)	共著	平成15年8月	臨床透析 2003版 19巻第9号	外来血液透析患者の高リン血症をより早く有効に改善できるよう、「いままでの行動修正」をめざした 栄養指導を実施してきた。指導により修正された行動を継続させるための要因と援助の方法を検討すると、①ガイドランス中心の栄養指導からの改善、②患者のステージに対応した取り組みが効果的、③指導の中で問題点を患者と一緒に考え、実際の行動については患者本人に主体的に選択してもらうが持続性を強めるための留意点である。全(pp.101~105) (担当部分)企画、実施、解析、考察、論文仕上げ全般 (共同研究者名)為房・大音・柏井
2	ケアプランニングNESTの立ち上げ、そして訪問管理栄養士の存在をアピールする!	単著	平成16年	在宅訪問栄養食事指導研究 2004版 第6巻	介護保険導入後、介護保険の在宅サービスの利用は伸び悩んでいる。そして、居宅療養管理のうち栄養指導の利用は本地域(大阪市)では皆無に等しい。したがって栄養管理は、管理栄養士が当たるとはならず介護者およびヘルパーに委ねられ、その不適切な栄養管理からQOLの低下、低栄養の傾向、疾病の進展、介護者の過度の負担増などの弊害が散見される。そこで、在宅療養者の有効な支援方法をつくりあげたいと考えた。(pp.14) (担当部分)企画、仕上げ全般
3	高齢糖尿病性慢性腎不全患	共著	平成16年4月	武庫川女子大学紀要 2003版51巻	本症例のような血圧の安定した患者では、クレアチニンクリアランスが25ml/min以下でもエネルギー充足のもとで、たんぱく質制限を緩和して0.7~0.8g/kgBW/dayで有意な腎障害の進展がみられない可能性が示唆された。また、標準体重あたりのたんぱく質摂取量は同量でも動物性たんぱく質比の上昇とともにクレアチニンの増加がみられたことも興味深い。 (担当部分)企画、実施、解析、考察、論文仕上げ全般 (共同研究者名)為房恭子、高岸和子
4	高齢糖尿病性慢性腎不全患者における外来栄養指導の一例(査読付)	共著	平成16年5月	日本病態栄養学雑誌	高齢糖尿病性慢性腎不全患者の低たんぱく食継続を容易かつ正確に可能にするための方法や要因について指導実施内容から検討した。①血圧安定症例では、たんぱく質制限を緩和しても進展遅延することができた。②治療食が奏効していることを示し、コンプライアンスを継続させる。③確実に実施できる簡便方法④嗜好にあわせる。⑤一食ずつの提示が有効である。などが示唆された。 (担当部分)企画、実施、解析、考察、論文仕上げ全般 (共同発表者)為房恭子、柏井浩三
5	在宅療養者の訪問栄養食事指導の実態とその課題(第1報)	共著	平成21年3月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	訪問栄養食事指導の利用率は11%であり、栄養改善サービスの利用率は6%とさらに低い。専門性の高い管理栄養士の指導の要求も示された一方で、医療・介護従事者が認識する「栄養指導」は、制限食イメージが強く、訪問管理栄養士目指しているものどけ離れていることも利用率の低さを反映していると推察された。適切な栄養管理サービスの提供のために訪問管理栄養士の教育・研修が重要な課題である。 (担当部分)企画、実施、解析、考察、論文仕上げ全般 (共同発表者)為房恭子、中村富子、遠妙美
6	在宅訪問栄養食事指導におけるニーズの実態とその関連因子の検討	共著	平成21年5月	大阪ガスグループ福祉財団研究	訪問栄養食事指導の認知度は高くなく、その利用率も低い。しかし、満足度は高かった。食や栄養の問題を抱えているとの認識は、在宅療養者は58%、スタッフの82%と乖離していた。在宅療養者の「食や栄養の問題を抱えている」と「ストレスが大きい」の関連(P<0.02)から、食そのものがストレス原因であり、訪問食事指導の依頼低迷の一因と推察された。スタッフからは、「どこに頼んでよいかわからない」が示すように在宅療養者を支援している管理栄養士の意識も本研究で明らかになった。今後は、適切な栄養管理サービスの提供のために、訪問管理栄養士の教育・研修が重要な課題であると考えられた。PP9-14 (担当部分)企画、実施、解析、考察、論文仕上げ全般 (共同発表者)為房恭子、中村富子、遠妙美
7	在宅療養者の訪問栄養食事指導の実態とその課題(第2報)	共著	平成22年3月	武庫川女子大学紀要(自然科学)	近年、入院医療から外来・在宅医療への流れを示している。その中で、在宅療養者の栄養食事支援である「訪問栄養食事指導」は、在宅医療継続の面から果たす割合は大きいと考えられる。我々の調査結果では、「食・栄養の問題を抱えている療養者」は82%存在した。また、食・栄養の問題点は、歯や口腔の問題から発生していると推察された。今回の調査では「食・栄養の問題を抱えている」と「ストレスが大きい」の相関から食事そのものがストレスとなっていると考えられた(P.33-P.37) (担当部分)企画、実施、解析、考察、論文仕上げ全般 (共同発表者)為房恭子、中村富子、遠妙美
8	Excessive fat restriction might promote the development of colorectal tumors.	共著	平成22年2月	Nutr. Cancer. 2010;62(2):154-63.	脂肪エネルギー比率を最適化する食事指導が大腸腫瘍発生を抑制するかどうかを調べた。脂肪摂取量を減少させた群ほど、大腸腫瘍の発生が増加した。体重当たりのリノール酸摂取量が増加するにつれて、男性では、リスクが有意に減少した。これらの結果は、極端な脂肪制限は大腸腫瘍発生を促進する可能性が高いことを示唆(P.154~P.163) (共同研究者)Nakamura T, Ishikawa H, Takeyama I, Kawano A, Ishiguro S, Otani T, Okuda T, Murakami Y, Sakai T, Matsuura N.
9	糖尿病患者と非糖尿病患者の体組成・食習慣の比較検討	共著	平成23年3月	相愛大学人間発達研究 2	大阪府立急性期・総合医療センターと共催した「糖尿病予防セミナー」参加者のデータを用いて、糖尿病患者と非糖尿病患者の体組成や食習慣を比較し、糖尿病患者特有の問題点を検討し、糖尿病予防の一助となる栄養サポート方法を模索することを目的とした。BMIが25以上の糖尿病患者は、25未満の糖尿病患者に比べて有意に野菜の摂取量が少なかった。野菜摂取勧奨は肥満が改善されない糖尿病患者の指導のポイントになると考えられた。(P.21~P.26) (共同研究者)中村富子、多門隆子、村井陽子、角谷勲、山口繁、堀野成代、小林貴美子、植田明美、笠井康正、馬屋原豊
10	高齢者の日常生活および食に関する意識調査と身体測定指標・エネルギー摂取量との関連(査読付)	共著	平成24年9月	日本食生活学会誌Vol.23 No.2	高齢者における主観的な日常生活及び食事に関する意識調査と身体測定・食事の関連を調査した。①主観的な日常生活および食事に関する質問に高い得点を示した)②健康に関して自己評価の高い群はむくみが低かった③食べたい物を食べる群と食生活満足度が高い群はない④同脂肪量の高い者の割合が高かった④健康度、生活満足度、食事を楽しんでいるかの項目は年代と関連を示す傾向にあり(p<0.1)についても良好群のうち80歳以上の割合が高かった。食事意識調査の結果は、内臓脂肪量と関連する可能性が示されたが、その項目の良否は身体測定項目とは関連しなかった。 (担当部分)企画、実施、解析、考察 (共同発表者)喜多村愛、為房恭子
11	特別養護老人ホーム入居高齢者におけるテーズ摂取による骨代謝への影響(査読付き)	共著	平成25年6月	日本食生活学会誌Vol.24 No.1	(担当部分)企画、実施、解析、考察 (共同発表者)為房恭子、喜多村愛、戎恵理佳、千尋、佐々木教和、中山正夫
12	重症アルツハイマー病における栄養障害の検討:特に低蛋白血症の病態生理について	共著	平成25年10月	帝塚山大学人間環境科学22	福岡県内病院に入院している認知症患者15名を対象に食事調査を行い、摂取エネルギー量が1000kcal以上と以下の群に分けて解析した。両群共に蛋白異化亢進の指標であるBUN/クレアチニン比が高値を示し、特に1000kcal以下の群では有意に高値を示した。この群では不動がより著明であった。不動が存在すると蛋白異化亢進が生じることが示唆された。(P.23~P.27) (共同研究者)天野信子、林田恵昌、加藤恵子、大塚豊子、他15名、中村富子、佐藤能啓
13	要支援高齢者における食品摂取多様性と食行動・食態度の関連	共著	平成29年	日本地域看護学会誌2017	矢野 朋子 他